

## Q 研究分野もしくは、担当科目の魅力を教えてください。

私が担当しているのは哲学です。哲学とは、とても簡単に言えば、いろいろなものごとについて、それが何であるのかを考えることに他なりません。「哲学って定義しているだけなのか…」と思われるかもしれませんが、もちろん、そういう哲学もあります。ですが、本当にすごい哲学は、「…とは何か？」を説明することによって、それまで見えていなかったものを見るようにし、世界についての新しい考え方を与えてくれます。

\*

たとえば、私が研究しているフランスの哲学者ジル・ドゥルーズが、本能と制度について述べていることを見てみましょう。

「本能と呼ばれるもの、制度と呼ばれるもの、これらは本質的には、満足を得るための手段のことである」(『無人島1953-1968』、河出書房新社、p.33)。

みなさんも、ほんやりとではあれ、本能や制度といった言葉の意味は知っていると思います。でも、それらが何なのかと考えたことがあるでしょうか。あるいは、これら二つを並べてみたことがあるでしょうか。

この定義からは実に様々な結論と問いが導き出せます。

- (1) 本能は手段なのだから、生物によって選択されたものである。ということは、生物は満足を得るために、その手段を変更することもある(本能は不変ではない)。
- (2) 満足を得るための手段という意味では本能も制度も変わらない。では、なぜ人間だけが制度を作るのか？(人間は本能が壊れつつあるからではないか？)
- (3) 制度と法律はしばしば混同されるけれども、全く別物である。法律は行為を限定するが、制度は行為のモデルである。たとえば、結婚制度は様々な欲求を満足させるための結婚のモデルを提示している。対し、結婚についての法律は、結婚という行為に限定をかけている(たとえば重婚の禁止)。

こんな具合です。分かっていると思っていたことに切り込む。そして見えていなかった何かを見るようにする。哲学はそれを可能にしてくれます。

\*

いまの世界には数え切れないほど多くの深刻な問題があります。それらの問題に切り込むためには、まず世界を見るようにしなければなりません。そのためには、哲学的な営みが絶対に必要です。

誰もが哲学者にならねばならないわけではありません。ただ、大学生の皆さんには、何を専攻するにせよ、ほんのすこしだけでも、哲学に関心をもっていてもらいたいと思っています。

### 推薦図書 最初に手に取る哲学の本として

- プラトン『国家』、岩波文庫、藤沢夫夫訳  
古代哲学ならこの一冊。政治における諸問題が今も昔もほとんど変わっていないことにおどろくはず。この本からは危険な全体主義の臭いもしてきます。
- ルネ・デカルト『方法序説』、岩波文庫、谷川多佳子訳  
近代哲学はデカルトから始まる。といっても、これはこの人の自伝のような本なので、すらすら読めます。気軽に手にとってください。
- イマヌエル・カント『永遠平和のために／啓蒙とは何か』、光文社古典新訳文庫、中山元訳  
一番すごいと思う哲学者は誰かと聞かれたら、迷わず、「カント！」と答えます。「永遠平和のために」の文盲がジョークだということから読んでください。
- カール・マルクス『資本論』、岩波文庫、向坂逸郎訳  
マルクスの意地悪な悪口を楽しみながら読んでください。そのうち、この本が必読であることが理解できるでしょう。
- ミシェル・フーコー『監獄の誕生』、新潮社、田村俣訳  
フランス現代思想から一冊挙げるならこれ。近代の権力について彼が述べていることには、深く納得できるはず。が、落ち込まないでください。



■倫理学  
■哲学入門

■現代社会学  
■哲学

國分 功一郎  
(こくぶん こういちろう)

1974年生まれ。千葉県出身。2008年4月より経済学部講師。専門は、17世紀哲学、フランス現代思想。